

最近のトピックス

小児歯科診療室における 26 年間の新生児・乳児患者の実態調査

A survey on the neonatal and infant patients at the Pediatric Dentistry Clinic over a period of 26 years

新潟大学歯学部 口腔生命福祉学科
口腔介護支援学講座
富沢美恵子

Division of Oral Care and Rehabilitation
Department of Oral Health and Welfare
Faculty of Dentistry
Niigata University
Mieko Tomizawa

【目 的】

出生から1歳にいたる新生児・乳児の全身的な成長発達は著しく、口腔内においても乳歯の萌出開始、吸啜から咀嚼へと形態的・機能的に大きな変化を遂げている。この時期に特異的な口腔疾患としては、上皮真珠、先天歯、Riga-Fede病、先天性エプーリスなどがよく知られているが、これまで症例報告や疾患毎の臨床統計などに限られ、0歳という年齢グループの口腔疾患についてまとめたものは殆どみられない。

今回は以上の観点から、小児歯科診療室における0歳児の口腔疾患の実態について調査したので紹介する¹⁾。

【対象と方法】

対象は、小児歯科が開設された1979年9月から2005年12月までの26年間に新潟大学医歯学総合病院小児歯科診療室を受診した18,616人の新患者のうち、234人の新生児および乳児である。小児歯科診療録、口腔内写真を資料として用い、資料不足の6名を対象から除外した。診断に基づいて11のグループに分類し、年齢、性別、部位、治療等について分析した。

【結 果】

性別・月齢別症例数は、男児125名女児109名で、最少年齢は、生後2日の先天歯症例であった(図1)。患児の70%は紹介なしで来院し、30%は院内の口腔外科、小児科、産婦人科、皮膚科や開業医よりの紹介であった。

最も多いグループは口腔粘膜疾患の46名(8名は先天歯と重複)で、以下、口唇口蓋裂45名、齶蝕などの診査を目的に来院し異常なしと診断されたもの28名、

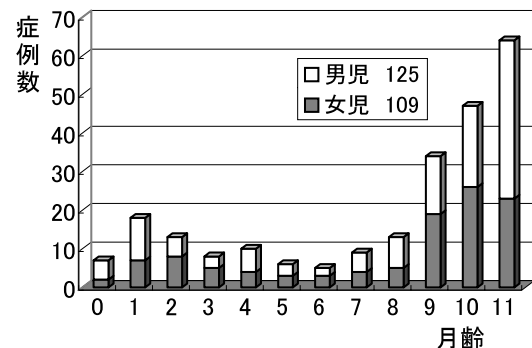


図1 性別・月齢別症例数

表1 診断別症例数

診 断	日齢・月齢	男児 (例)	女児 (例)	計 (例)	(%)
口腔粘膜疾患	21d-11m	23	23	46 (*8)	(19.0%)
口唇口蓋裂	1m-11m	24	21	45	(18.6)
異常なし	1m-11m	14	14	28	(11.6)
上唇小帯高位付着	1m-11m	12	14	26	(10.7)
先天歯	2d-10m	10	11	21	(8.7)
外傷	6m-11m	14	7	21	(8.7)
歯の異常	9m-11m	9	6	15	(6.2)
舌小帯強直症	1m-11m	8	6	14	(5.8)
歯の萌出異常	3m-11m	6	5	11	(4.5)
咬合異常	8m-11m	2	6	8	(3.3)
その他	25d-11m	6	1	7	(2.9)
計	2d-11m	128	114	242 (*8)	(100)

(*: 先天歯と重複カウント)

上唇小帯高位付着 26 名, 先天歯 21 名, 外傷 21 名, 歯の異常 15 名, 舌小帯強直症 14 名, 歯の萌出異常 11 名, 咬合異常 8 名, その他 7 名であった (表 1)。

口腔粘膜疾患についてみると, 乳児期に特異的な上皮真珠とリガ・フェーデ病の両者で 50% を占めていた (表 2)。上皮真珠の発現部位は, 上顎 1 例, 下顎 5 例, 上下顎 2 例, 不明 4 例で全例経過観察した。リガ・フェーデ病 11 例の原因歯は, 先天歯 7 例, 正常に萌出した下顎乳中切歯が 4 例であった。そのうち 2 例は上顎前歯部歯肉, 舌背にも浅い潰瘍を形成していた。リガ・フェーデ病の治療は, 一般に切縁の削合や抜歯などが行われているが, 当診療室で開発した光重合レジンを用いて原因歯の切縁を覆い, 刺激を軽減する方法によって抜歯せず良好な結果を得た (図 2)。萌出嚢胞の発現部位は, 下顎乳中切歯が 5 例で, 下顎乳側切歯, 上顎乳側切歯, 上顎第一乳臼歯が各 1 例であった。口蓋ポリープの 3 例は, すべて切歯乳頭に近接した硬口蓋のほぼ同部位にみられた。2 例には摘出術を行い, 生後 20 日で来院した 1 例は経過観察後縮小した。エプーリスの 2 例は, 先天性エプーリスではなく, 肉芽腫性および骨形成性エプーリスと病理学的に診断された。粘液嚢胞の 1 例は舌下型ガマ腫で口腔外科に紹介した。

口唇口蓋裂 45 例中 4 例では, 上顎乳切歯に齲蝕が認められ, 乳歯萌出前からの口腔管理の必要性が示唆された。

表 2 口腔粘膜疾患の内訳

診 断	症例数	(%)
上皮真珠	12	(26.1%)
リガ・フェーデ病	11(*7)	(23.9)
萌出嚢胞	8	(17.4)
萌出性歯肉炎	4	(8.7)
口蓋ポリープ	3(*1)	(6.5)
エプーリス	2	(4.3)
粘液嚢胞	2	(4.3)
口内炎	2	(4.3)
血管腫	2	(4.3)
計	46(*8)	(100)

(* : 先天歯と重複カウント)

異常なしと診断された 28 例は, 齲蝕や歯の萌出状態の診査, フッ化物塗布を希望して来院していた。

上唇小帯の歯槽頂部への高位付着を主訴に来院した 26 例中 24 例は, 歯槽骨の成長に伴って付着部位が変化するため経過観察した。乳中切歯歯間乳頭に炎症のみられた 2 例については, 上唇小帯切除術を行った。

先天歯は, すべて下顎乳中切歯で, 片側性 15 例, 両側性 6 例であった。リガ・フェーデ病を伴ったものは 7 例であった。14 例は経過観察し, 動揺が強いために抜歯したもの 4 例, 自然脱落が 3 例にみられた。

外傷は生後 6 か月以降の乳児にみられ, 軟組織外傷 7 例, 歯の外傷 14 例であった。軟組織では上唇小帯 5 例, 下唇・舌各 1 例の裂傷があり, 上唇小帯の 1 例に縫合を行った以外は経過観察した。歯の外傷は 14 症例 22 歯(上顎乳中切歯 4, 下顎乳中切歯 17, 下顎乳側切歯 1) で, 脱臼 7 例, 脱落 4 例, 振盪・陥入・歯冠破折が各 1 例であった。治療は, ワイヤとレジンあるいはレジンシーネによる固定 3 例, 抜歯 2 例, 再植 1 例, 経過観察 8 例であった。

歯の異常は, 上顎乳中切歯基底結節の過剰発育 6 例, 形成不全歯 5 例, 癒合歯が 4 例であった。基底結節および癒合歯には齲蝕予防のためシーラント填塞を行った。

歯の萌出異常には, 上顎乳中切歯よりも乳側切歯が先に萌出したもの 5 例, 萌出遅延と早期萌出例がそれぞれ 3 例あり, 全例経過観察した。

舌小帯強直症は 14 例あり, 切除したもの 1 例の他は経過観察を行った。2 歳以降に全身麻酔下に舌小帯伸展術を施行したものが 2 例あった。

咬合異常 8 例は, 前歯部反対咬合 6 例と歯の捻転 2 例で経過観察を行った。

その他の 7 例のうち 2 例は腫瘍の疑いで口腔外科に紹介し, 上顎ヒステリオサイトーシス X, 下顎黒色神経外胚葉性腫瘍と診断された。5 例は上顎乳犬歯部の乳歯過剰歯が早期に排出されたもの, 下顎第一乳臼歯顎堤部の線維上皮性過形成, 歯肉出血から血友病 A と診断されたもの, 下顎乳側切歯へのストローの圧入, 脳性麻痺による摂食障害であった。



図 2 a : 先天歯によるリガ・フェーデ病 (生後 1 か月 8 日), b : 光重合レジンによる切縁部被覆, c : 3 週間後, 潰瘍は縮小している。

【ま と め】

今回の調査から、全患数16,884名中の0歳児の割合は、234名、1.3%と低かったが、新生児・乳児の口腔内には種々の病態が発現していることが明らかになった。治療については、直ちに処置を要するもの、成長発育に伴う変化を観察するものなどがあり、その後の幼・

小児期を通じての順調な発育を促すため、早期からの専門医による口腔管理の必要性が示唆された。

【参考文献】

- 1) Tomizawa M, Sano T and Noda T: Oral conditions in Japanese infants: A retrospective study. Ped Dent J, 17: 65-72, 2007.